

展示にあたって

ここに展示した資料は、百万塔陀羅尼からはじまる日本出版印刷文化史の中で、本学が所蔵する代表的なものを選んだ。また参考までに、欧州での活版印刷創始者である、グーテンベルクの印刷物も併せて展示した。

この貴重な文化的遺産の展示が、印刷文化史考察の一助となれば幸いである。

昭和五十七年五月

一 百万塔陀羅尼

宝亀元年（七七〇）刊  
用紙穀紙 5.9×42.3cm 三十一行 塔の高さ（上部8cm+下部13cm）20.3cm 相輪陀羅尼第一類（弘文荘古版本目録－弘文荘待賈古書目録第四十五号）  
百万塔陀羅尼

印刷年が明らかなものの中では、世界最古の印刷物（木版印刷か銅版刷かとの論争は、百年以上になるが、結着がついていない）で、奈良時代の宝亀元年（七七〇）につくられた。塔は、轆轤（ろくろ）細工でつくられ、三層の塔から成り、その上部は堀り抜かれ、その中に「無垢浄光大陀羅尼經」が収められ、そのふたとして「九輪のぎぼし」が栓になっている。

二 摺仏（二重連弁阿陀仏座像）

平安末期刊 二枚  
楮紙 45×28cm  
摺仏  
千体仏の摺仏は、死者の供養、病氣平癒や国家安泰を祈願し、仏や菩薩などの図像を刷ったもの。中国は唐時代から、日本では平安中期以降に流行したと言われている。ここに紹介した摺仏は、二重連弁阿陀仏座像である。

三 成唯識論 第七卷

文永頃（一二七〇年頃）刊 春日版 一冊  
折本 布表紙 用紙楮紙 竪28.8cm 題簽中央

四 大般若波羅密多經 第四七五

応永十七年（一四一〇）春日版 一冊  
折本 紙表紙 用紙楮紙 竪25.9cm 応永十七年卯月三日願主沙門性恵  
春日版  
仏教信仰は、写經の功德を説くものが中心であるが、しだいに書写を行なう者が増し、摺經へと転移していった。平安時代の後半から藤原氏の氏寺興福寺とその支配下の春日社で「成唯識論（じょうゆいしきろん）」「因明正理門論」などが次々と開版された。これらの出版物を春日版と呼んでいる。

五 貞観政要

慶長五年（一六〇〇）刊 古活字本（伏見版）十卷八冊  
袋綴 紙表紙 用紙楮紙 30.6×20.6cm 四周双辺 每半葉七行 外題左肩 板心に「貞観」および巻・丁数 慶長五年  
伏見版  
慶長四年（一五九九）から、同一一年（一六〇六）までの八年間に、徳川家康が京都伏見において、木活字を用いて、僧元信の監督の下に刊行させたもの。出版物は、「孔子家語」「三略」「六韜」「貞観政要」「東鑑」「周易」「七書」等の八種八十冊に及ぶ。

六 むめがえ

慶長中（一六〇〇年代）刊 古活字本（光悦本）  
胡蝶装 紙表紙緑地に雲母刷飛び交う鶴の文様 用紙鳥の子 24×18cm 每半葉七行 每行十三字 字高18.9cm 十丁 題簽左肩 光悦本 謡曲百番の内

七 伊勢物語

慶長十三年（一六〇三）刊 古活字本（嵯峨本）二冊  
袋綴 紙表紙（灰色）用紙雁皮紙五色変り 26.8×19cm 每葉九行 每行十八字 字高22.5cm 題簽中央 絵入「高木家蔵」印あり  
第二種本 嵯峨本伊勢物語（川瀬一馬氏「古版字版の研究」による）  
嵯峨本  
本阿弥光悦らが京都の嵯峨で出版した豪華版の総称。慶長の後半期、国文学書ことに絵入本出版の最初で、大部分は平仮名交り木活字印刷である。版下が光悦の自筆または、その門流によるところから別名光悦本、また開版援助者の角倉素庵にちなんで角倉本とも呼ぶ。用紙に雲母を引さ、料紙や色紙などを用いた美書である。

八 源氏小鏡

元和中刊（一六一〇年代）古活字本 三卷三冊  
袋綴 紙表紙（黄丹色）用紙楮紙 18.8×27.9cm 每半葉十二行 每行約二十二字 字高22.2cm 外題左肩 「宝玲文庫」「青谿書屋」印あり  
十二行本口種（川瀬一馬氏の「古活字版の研究」による）

九 天台三大部補注

寛永三年（一六二六）刊 古活字本（本能寺版）十四卷十四冊  
袋綴 紙表紙（探緋色）用紙椿紙 28.5×19.4cm 四周単辺有界 每半葉十六行 毎行十九字 字高22.9cm 板心に「補注」および巻・丁数 寛永三年洛陽本能精舎板行 「春翠文庫」印あり

一〇 観心略要集

寛永三年（一六二六）刊 古活字本（叡山版）一冊  
源信著 袋綴 紙表紙（紺紙）用紙椿紙 28.1×20cm 四周単辺 每半葉十行 毎行二十字 字高22.6cm 四十九丁 外題左肩 板心に「略要集」および丁数 寛永丙寅林鐘吉晨開板 「小汀氏蔵書」「をばま」印あり

一一 庭訓往来

元和五年（一六一九）刊 板本 一冊  
袋綴 紙表紙（紺紙）用紙椿紙 28×16.3cm 每半葉六行 六十二丁 題簽左肩 板心に「庭訓」および丁数 元和五年伊藤新兵衛開板

一二 庭訓往来

寛永一六年（一六三九）刊 板本 二卷二冊  
袋綴 紙表紙（茶色）用紙椿紙 27.5×18.8cm 四周単辺 每半葉十行 毎行十八字 題簽左肩 板心に「庭訓抄」および巻・丁数「アカキ」「赤木文庫」印あり

一三 順礼物語

寛永頃（一六二〇年代）坂本 三卷三冊  
三五庵木算（三浦浄心）著 袋綴 紙表紙（紺紙）用紙椿紙 28×19.9cm 每半葉十行 題簽左肩 板心に「順礼」および巻・丁数「高木家蔵」印あり  
注・別書名 三浦浄心諸国行脚物語 名所和歌物語

一四 沢庵和尚鎌倉記

万治二年（一六五九）刊 板本 二卷一冊  
沢庵宗彭著 袋綴 紙表紙（龍門文入紗綾文様）用紙椿紙 25.5×18cm 四周単辺 每半葉十一行 題簽中央 板心に「鎌倉記」および丁数 絵入 万治二年林重右衛門開板「アカキ」印あり

一五 見ぬ京物語

万治二年（一六五九）刊 板本 三卷三冊  
袋綴 紙表紙（黒紙）用紙椿紙 26.3×17.4cm 每半葉十一行 題簽および外題なし 板心に巻数および丁数 絵入 「アカキ」「よこ山」「重」印あり  
付箋云天理文庫、東洋文庫共に中欠

一六 むさしあぶみ

万治四年（一六六一）刊 板本 二卷二冊  
浅井了意著 袋綴 紙表紙（紺紙）用紙椿紙 25.9×18.1cm 每半葉十一行 題簽左肩 板心に書名および丁数 絵入 万治四年中村又兵衛 「霞亭文庫」「甘露堂蔵」「平井文庫」「アカキ」印あり

一七 京雀跡追

延宝五年（一六七七）刊 板本 二卷二冊  
袋綴 紙表紙 用紙椿紙 8.4×19cm（横長本）四周単辺 每半葉十九行 題簽左肩（題簽には「絵入 京雀跡追」とあり）板心に丁数 絵入 延宝五丁巳仲春吉辰 清水五郎左衛門 「アカキ」印あり（下巻には「重」印もあり）  
注・刊記は別紙にて下巻巻末に補記

一八 江戸大絵図

延宝七年（一六七九）刊一枚  
折畳 紙表紙（縹色）用紙椿紙 127×141cm（折りたたみ 26×17.8cm）題簽中央（題簽には「増補 江戸大絵図 絵入」とあり）絵入 延宝七己未歳七月吉辰日 表紙屋市良兵衛 「アカキ」印あり

一九 京師巡覧集

延宝七年（一六七九）刊 板本 一五卷一五冊  
文愚（六々堂石徴）著 袋綴 紙表紙（紺紙）用紙椿紙 22.4×16cm 四周単辺 每半葉九行 題簽左肩（題簽には「新刊京師巡覧集」とあり）板心に「京」および巻・丁数 延宝七年中村加兵衛刊 「高木家蔵」「園林文庫」印あり

二〇 新編伊勢名所拾遺集

延宝九年（一六八一）刊 板本 二卷四冊  
竜貞玄（尚舎）著 袋綴 紙表紙（褐色）用紙椿紙 27.4×19.2cm 四周単辺 每半葉十行 題簽左肩 板心に「伊名」および巻・丁数 延宝九辛酉年仲秋吉日 中野宗左衛門板行 「アカキ」印あり

## 二一 名所都鳥

元禄三年（一六九〇）刊 板本 六卷八冊  
袋綴 紙表紙（紺紙）用紙楮紙 22.5×16.5cm 四周単辺 每半葉十行 題簽中央（題簽には「類聚 名所都鳥」とあり）板心に「都鳥」および巻・丁数 絵入 元禄第三庚午歳春二月穀旦 吉田四郎右衛門

## 二二 絵本袖中 雛源氏

正徳頃（一七一〇）刊 板本  
袋綴 紙表紙 用紙楮紙 11.2×8.2cm 四周双辺 二十七丁 題簽中央 板心に「けんじ」および丁数 彩色絵入 丁子屋源治郎版  
袖珍本（しゅうちんぼん）  
江戸時代に、源氏物語を直接読むほどには知識のなかった庶民が、袖の中などに入れて気軽に読んだもの。物語の各帖ごとに和歌をあてはめた要約版。

## 二三 源氏五十四帖絵尽

文化九年（一八一二）刊 板本 一冊  
袋綴 紙表紙（茶色）用紙楮紙 8.8×6.3cm 四周単辺 五十八丁 題簽左肩 絵入  
文化九壬申年和泉屋市兵衛梓

## 二四 五十四帖源氏発句雙六

江戸中葉刊 一枚  
松高斉春亭画 用紙楮紙 46×66cm 外題右肩 絵入 馬喰町江崎屋板

## 二五 洛東清水寺奉額抜句上座 板木（幕末頃）

城南瓶川追善

## 二六 絵入往来物板木

天保十三年（一八四二）  
板木  
むかしは、彫板（えりいた）、形木（かたぎ）とも称した。板材としては、古くはヒノキ（檜）を用い、十五世紀室町時代以後は、サクラ（桜）、ナシ（梨）、ホウ（朴）、細密面の場合にはツゲ（黄楊）を使用したのが、サクラが普通である。

## 二七 The Rokkasen

明治二七年（一八九四）刊 一冊  
秋山愛三郎編 袋綴 表紙六歌仙の絵あり 用紙縮緬（ちりめん）紙 19.8×25.2cm 七丁  
外題 釈色絵入縮緬表 明治二七年秋山愛三郎刊 本文六歌仙の歌に英文の翻訳あり  
ちりめん本  
印刷された絵を押し揉んで、あたかも縮緬（ちりめん）布に描いた絵の如き感じを出したものの。英・独・仏文があるがいつでも日本語を併用したり、或は日本の物語等の要約版が主である。

## 二八 グーテンベルク「四十二行聖書」

一四五二年頃刊 原葉一枚  
グーテンベルク「四十二行聖書」  
活版印刷の父、グーテンベルクの印刷したもので、一四五〇～五五年にかけて完成し、一～九頁が四十行、十頁目が四十一行、以後四十二行となっている。大きさは縦42cm、横30.5cmのフォリオ（二つ折）版で、本文は二段組、総数六四二葉、これに目次四葉を付し、上下巻に分れている。使用活字は当時の代表的な書写本に範をとったゴシック体で、大きさは今日の二十ポイント大にあたる。印刷全部墨刷で、行の始めの頭文字は、後から手彩色するため空白となっていた。印刷部数は二百十部、内、百八十部は紙刷本、残り三十部は、パーチメント（羊皮紙）に印刷したものである。用紙は手渡きで、星とブドウの房を配した牡牛の頭の漉込みがあり、紙質は極めて良い。現存する完本は世界で約二十二部である。  
本学で所蔵している「四十二行聖書」は、オリジナル一葉と復刻版二巻本である